第三章　鬚黒大将家の物語　北の方、子供たちを連れて実家に帰る

［第一段　式部卿宮、北の方を迎えに来る］

修法などし騒げど（僧に卍の印を切らせたりなどして夫人の魔封じを目下の主眼と厳しく行わさせたが）、御もののけこちたくおこりてののしるを聞きたまへば（夫人の祟りが激しく起こって口汚く大将や姫の悪口をわめき散らしているのをお聞きになると）、「あるまじき疵もつき（夫人の名誉に傷も付き）、恥ぢがましきこと（当家の恥になることが）、かならずありなむ（きっとあるだろう）」と、恐ろしうて寄りつきたまはず（大将は近くに寄り付きなさいません）。

殿に渡りたまふ時も（自邸にお帰りになるときも）、異方に離れゐたまひて（法事の正殿とは違う対屋に離れて構えなさって）、君達ばかりをぞ呼び放ちて見たてまつりたまふ（子供たちだけを呼び出して御会い申しなさいます）。女一所（をんなひとところ、姫がお一人）、十二、三ばかりにて（12，3歳ほどで）、また次々（その下に）、男二人なむおはしける（子息がお二人といらっしゃいます）。

近き年ごろとなりては（最近こそは）、御仲も隔たりがちにてならはしたまへれど（御夫婦仲も疎遠がちにお暮らしだったが）、やむごとなう（夫人は高貴な方で）、立ち並ぶ方なくてならひたまへれば（正妻でいらっしゃったので）、「今は限り（お帰りになっても私に会わないのでは、もうおしまいだ）」と見たまふに（と御思いになり）、さぶらふ人びとも（仕える女房たちも）、「いみじう悲し（身に沁みて悲しい）」と思ふ（と思います）。

父宮、聞きたまひて（この状態を聞き知りなさって）、

「今は（今や）、しかかけ離れて（そこまで疎遠に）、もて出でたまふらむに（大将が為さろうと言うのに）、さて（それでも）、心強くものしたまふ（辛抱なさるのは）、いと面なう（いとおもなう、とても恥ずかしく）人笑へなることなり（人からも見下されることです）。おのがあらむ世の限りは（私が生きているうちは）、ひたぶるにしも（そんな一方的に）、などか従ひくづほれたまはむ（夫に従って卑下なさることはない）」

と聞こえたまひて（とお申し出なさって）、にはかに御迎へあり（俄かに御迎えがあります）。

北の方（夫人は）、御心地すこし例になりて（ご気分が少し平常に戻って）、世の中をあさましう思ひ嘆きたまふに（今の状態を情けなく思い嘆きなさる所に）、かくと聞こえたまへれば（このお申し出をお聞きなさると）、「しひて立ちとまりて（この上までも此処に止まって）、人の絶え果てむさまを見果てて（尚侍君を迎え入れた後に、夫の自分への愛想尽かしを見届けてから）、思ひとぢめむも（諦めようと言うのでは）、今すこし人笑へにこそあらめ（更に恥の上塗りだ）」など思し立つ（などと里帰りを決心なさいました）。

御兄弟の君達（おほむせうとのきみたち、夫人の弟の公子たちが）、兵衛督は上達部におはすればことことしとて（兵衛督は政府幹部なので仰々しいからと遠慮し）、中将（近衛中将）、侍従（中

務省近侍)、民部大輔(みんぶのたいふ、課税管理局の民部省次官)など、御車三つばかりしておはしたり(牛車三台を連ねた使者でした)。

「さこそはあべかめれ(いつかはこの日が来るだろう)」と、かねて思ひつることなれど(かねてから思っていたことだが)、さしあたりて今日を限りと思へば(その日を前にしていよいよ終りだと思えば)、さぶらふ人びとも(仕える女房たちも)、ほろほろと泣きあへり(感極まって泣き合いました)。

「年ごろならひたまはぬ旅住みに(今までとは違いなさる仮住まいは)、狭く(せばく、手狭で)はしたなくては(お邪魔になるので)、いかでかあまたはさぶらはむ(どうしても同じような大勢でお仕えすることが出来ません)。かたへは(半数ほどは)、おのおの里にまかでて(それぞれ暇を取って)、しづまらせたまひなむに(奥方に落ち着いて頂かないと)」

など定めて(などと上臈が取り仕切って)、人びとおのがじし(女房たちは各自)、はかなきものどもなど(私物の道具類を)、里に払ひやりつつ(里に運び出したりして)、乱れ散る*べし(散り散りにならざるを得ません)。御調度どもは(夫人のお引越道具類を)、さるべきは皆したため置きなどするままに(然るべく全て荷造りしながら)、上下泣き騒ぎたるは(上臈も下臈もなき騒ぐのは)、いとゆゆしく見ゆ(とても悲しい光景です)。 *「べし」は「定め」を受けているので＜推量ではなく、当然の帰結を示す助動詞＞だ。

[第二段　母君、子供たちを諭す]

君たちは(お子様たちが)、何心もなくてありきたまふを(無邪気に邸内を歩き回っていらっしゃるのを)、母君(母君である夫人は)、皆呼び据ゑたまひて(全員を呼び寄せて座らせなさって)、

「みづからは(私は)、かく心憂き宿世(自分の辛い運命を)、今は見果てつれば(今は観念して受け入れるので)、この世に*跡とむべきにもあらず(この家の女主人を務めるべきではなく)、ともかくもさすらへなむ(ともかくも出て行きます)。*生ひ先遠うて(あなた方の人生はまだ先が長いから)、さすがに(こうして)、*散りぼひたまはむありさまどもの(生活の支柱を失くしなさる諸事情で)、悲しうもあべいかな(悲しい目にも遭うことでしょう)。 *「跡留む(あととむ)」は＜生き続ける＞とあるが、基本的には「足跡を残す」という言い方だろうから＜それなりの生き方をする＞という語感で、となると、むしろ「この世に」が＜この家で＞という意味なのかと思う。 *「おひさきとほし」は＜人生の先が長い＞。*「ちりぼふ」は＜散らばる→支柱を失う＞。

姫君は、となるともかうなるとも(先の事は分からないが)、おのれに*添ひたまへ(私に付いていらっしゃれば良いでしょう)。なかなか(でも)、男君たちは(男の子たちは)、*えさらず参うで通ひ見えたてまつらむに(必ず役所勤めをして出世を目指すのに)、*人の心とどめたまふべくもあらず(大将殿の引き立てが期待できなければ)、*はしたなうてこそただよはめ(下っ端の者となって苦労するでしょう)。 *「そひたまへ」は命令形のようにも見えるが、「なかなか」以下の文意を拾えば、むしろ已然形で＜～ば、良かし＞が省略されたものと読みたい。 *「えさらず」は＜どうしても避けられず→必ず＞。「まうでかよふ」は＜役所勤めをする＞。「見え奉らむ」は＜帝のお目見えが適うように出世に励む＞。 *「人の」は注に＜父親の鬚黒が。＞とある。子供を前にして父親をこういう言い方で呼ぶのは、格式なのか冷たさなのか、何れ

親しみはない。また、「たまふべくもあらず」は＜あらずば～こそ～あらめ＞の構文。　*「はしたなし」は＜体裁が悪い、みっともない＞という語感だが、此処では原義のままの＜下っ端者を成す＞で意味が通る。「ただよふ」は＜さまよう、落ち着かない、不安定だ→生活に苦労する＞。ただ、「生活に苦労する」とは言っても、この物語が「家政婦は見た」の視点で語られるので、確かに関係者の実感が示されもし、つい一寸した上流家庭の話のように思いがちだが、父親の右大将は太政大臣、内大臣、に次ぐ実力者とされ、即ち藤原右家筆頭であり皇太子の叔父であり、母方の祖父の式部卿宮は故藤壺中宮の兄宮であり、即ち今上帝の伯父宮として王家の中でも今をときめく地位にあるという、とびっきりの貴家ではある。

宮のおはせむほど（宮が生きていらっしゃる内は）、形のやうに交じらひをすとも（形ばかりの重職には就けても）、かの大臣たちの御心にかかれる世にて（あの新婦の親筋である両大臣のお気持ち次第で人事が諮られる政府ですから）、かく心おくべきわたりぞと（私の血筋と言うことで気を許せ無い者たちだと）、さすがに知られて（その内に知られて）、人にもなり立たむこと難し（一角の者になることは難しいでしょう）。さりとて（だからといって）、*山林に（やまはやしに、出家して山中の隠棲生活に入る私に）引き続きまじらむこと（付き従って隠れ住んだのでは）、*後の世までいみじきこと（血筋が絶えてご先祖に申し訳が立ちません）」　*「山林に引き続きまじらむこと」は注に＜自分が出家遁世し、息子たちも後を追って出家し山林に姿をくらますこと。＞とある。「まじる」は＜山中に分け入る＞とある。　*「のちのよ」は＜来世＞で、「まで」は＜事物の影響が及ぶ限度を示す副助詞＞で、その影響は「いみじ（はなはだ遺憾）」だという。来世に影響する＜はなはだ遺憾＞な事柄は色々あるだろうが、その最たるものは＜来世が無い＞ことだろう。即ち、血筋が絶える。

と泣きたまふに（と泣き為さることに）、皆（子供たちは皆）、深き心は思ひ分かねど（深い意味は分からないが）、うちひそみて泣きおはさうず（母の辛さを感じて悲しげにべそを掻いていらっしゃいます）。

「*昔物語などを見るにも（昔話を見ても）、世の常の心ざし深き親だに（普通の愛情深い父親でさえ）、時に移ろひ（事情が変わって再婚し）、人に従へば（後妻の言うことを聞けば）、おろかにのみこそなりけれ（前妻との子は疎かになるばかりです）。まして（まして大将殿のような）、形のやうにて（形ばかりの親で）、見る前にだに名残なき心は（目の当たりに見せ付けられた薄情さでは）、*かかりどころありてももてないたまはじ（頼れる実力があっても力を貸しては下さらないでしょう）」　*「昔物語などを見るにも」は注に＜以下「もてないたまはじ」まで、北の方の詞。『住吉物語』『落窪物語』などの父親が後妻と結婚生活を続けるうちにやがて先妻の子供は父親の愛情も薄れてゆき、さらには継母からも苛められていくような話を想定する。＞とある。この注の筋に従って、「時に移ろひ」を＜再婚して＞、「人に従へば」を＜後妻の言いなりで＞、と読まないと意味が分からない文だ。ただ、注の＜北の方の詞＞には従えない。自分の子供の将来について、昔話などを引き合いに出した一般論を、夫人は一体誰に語ろうと言うのか。それこそ、時が経ってこの事自体が昔話にでもなったら、古い友人に話す機会はあるかも知れないが、今は無理だ。　*「かかりどころ」は＜頼りになる点、頼れる実力＞。

と、御乳母どもさし集ひて（乳母の王族女房たちが寄り集まって）、*のたまひ嘆く（仰り嘆きます）。　*「のたまひ嘆く」という敬語表現から、この文は注に＜子供たちの乳母も北の方と一緒になっておっしゃり嘆く。敬語があるので、北の方を中心にした表現。＞とある。「差し集ふ」の「差す」は＜その場の流れで偶々現出する＞語感。夫人が乳母たちを集めたわけではない。「おほむめのとども」は君達の乳母だから「御」が付くのだろう

か。ただ乳母は多くの場合、普通の女房ではなく遠縁にしても夫人の血縁者、従姉妹あたりが考えられるので、この乳母たちは元々王族の貴婦人だったのだろう。それで「御」も付くし、敬語表現にもなる、と私は思う。

［第三段　姫君、柱の隙間に和歌を残す］

日も暮れ（日も暮れて）、雪降りぬべき空のけしきも（雪が降ってきそうな空模様も）、心細う見ゆる夕べなり（心細く見える夕べです）。

「いたう荒れはべりなむ（だいぶ荒れ模様です）。早う（早く）」

と、御迎への君達そそのかしきこえて（御迎えの宮家の弟君たちが出発を促し申して）、御目おし拭ひつつ眺めおはす（涙目を押し拭いながら大将家との別れを惜しむ夫人たちの様子を見ていらっしゃいます）。

姫君は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに（大将殿がとても可愛がっていらした日頃の習慣から）、

「見たてまつらではいかでかあらむ（父上にご挨拶申し上げなければなりません）。『今（では参ります）』なども聞こえで（なども申し上げなければ）、また会ひ見ぬやうもこそあれ（もう会えなくなるような気がします）」

と思ほすに（と御思いになって）、うつぶし伏して（床に突っ伏して）、「え渡るまじ（行かない）」と思ほしたるを（とお思いなのを）、

「かく思したるなむ（そう我を張っては）、いと心憂き（困ります）」など、こしらへきこえたまふ（夫人はなだめなさいます）。

「ただ今も渡りたまはなむ（もう直ぐお帰りなさる）」と、待ちきこえたまへど（姫君は大将殿をお待ち申しなさるが）、かく暮れなむに（このように日が暮れようという男が女の家に通う時分に）、*まさに動きたまひなむや（殿は正に今動きなさるものやら）。　*「まさに」は＜正にちょうど今＞だから、「かく暮れなむ」が＜男が女の家に通う時分＞だと言う含みがなかったら、「たまひなむや」の疑問文に皮肉を込めることが出来ない。

常に寄りゐたまふ東面の柱を（いつも寄り掛かって座っていらした東庇の柱を）、人に譲る心地したまふもあはれにて（人に譲る気になりなさるのも悲しくて）、姫君、桧皮色の（ひはだいろ、赤茶色の）紙の重ね（紙を折り重ねたものに）、ただいささかに書きて（小さい字で歌を書いて）、柱の干割れたるはさまに（柱のひび割れた隙間に）、笄（かうがい、髪留め）の先して押し入れたまふ（の先で押し入れなさいます）。

「今はとて宿かれぬとも馴れ来つる、真木の柱はわれを忘るな」（和歌 31-06）

「住み慣れて名残尽きない真木柱」（意訳 31-06）

*注に＜姫君の歌。「真木」は歌語。『大系』『評釈』『全集』『完訳』は「東風吹かば匂いおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」（拾遺集雑春、一〇〇六、菅原道真）を引歌として指摘する。この和歌が姫君の呼称となり、さらに巻名となる。＞とある。「やどかれぬ」は「宿離る（やどかる、家を去る）」の確定強調句。複意の有無は分からない。語呂では、「なれき」と「まき」の対比が印象的だ。「なれき」は「馴れ来（住み慣れた）」と「馴れ木（なびいた木、曲がった木）」。「真木」は＜りっぱな木。多くはヒノキ。＞と古語辞典にあるが＜真っ直ぐな木＞でもあるのだろう。この詠み方からは「真木」に＜本当の木、自分の生家＞みたいな響きも感じるが、「まき」の語自体にその意味があるのかは分からない。しかし、「柱」は家の空間を支える構造部材で、その家の生活基盤を象徴するものでもあり、一般的には＜父親の存在感、およびその権威＞を実質で示し、且つ表象する。ところで、この柱のひびに紙を差し込むというはすっぱな仕種は姫の無邪気さと父親への愛着を表す演出だろうし、確かに印象的な場面だが、13 歳というのは 8 歳ぐらいのあどけなさに比べれば大人であってもおかしくない年頃で、それがまた「まさに」のギリギリ感にも通じるという作者の計算だろうか。

　えも書きやらで泣きたまふ（姫は上手く書けないで泣きなさいます）。母君、「いでや（さあ、もう行きますよ）」とて（と、姫を急かせなさる心をこう詠みなさいます）、

「馴れきとは思ひ出づとも何により、立ちとまるべき真木の柱ぞ」（和歌 31-07）

「馴れ木ならいっそ似合わぬ真木柱」（意訳 31-07）

*姫が詠んだ「馴れ来」を「馴れ木」に掛けて返す。「馴れ木」は＜くたびれた古木＝駄木＞。娘が詠んだ＜柱に父親の威厳を感じる歌意＞を真っ向から否定する夫人の歌、なのだろう。

　御前なる人びとも（お目見え女房たちも）、さまざまに悲しく（それぞれに悲しく）、「さしも思はぬ*木草のもとさへ恋しからむこと（それほどに思って来なかったこの庭先の木や草までも名残惜しい）」と、目とどめて（庭に目を止めて）、鼻すすりあへり（涙ぐみます）。　*「きくさのもと」は＜庭先の木や草の根元＞だが、姫が詠んだ＜「やどかれぬ」という上句＞に掛けた洒落言葉かも知れない。「やどかれぬ」は「屋戸枯れぬ」で＜出入り口前の庭が手入れをしないで荒れてしまう＞みたいな。

　木工の君は、殿の御方の人にて*とどまるに（殿の方の筆頭上臈として玄関先まで見送りに出ているので）、中将の御許（夫人方の筆頭上臈たる中将の御許は）、　*「留まる」は＜大将家に残る＞だが、この場面での意味は玄関先で夫人一行を見送るということだろうし、此処での木工の君は召人というより殿の信頼厚い筆頭上臈の立場で大将家を代表しているに違いない。

「浅けれど石間の水は澄み果てて、宿もる君やかけ離るべき　（和歌 31-08）

「浅くてもヒビから水は染み出して、欠けた器は直らない　（意訳 31-08）

*注に＜中将の御許から木工の君への贈歌。「石間の水」に木工の君をたとえる。「宿守る君」は北の方をさす。「すみ」に「住み」と「澄み」を掛け、「かけ」に「かけ離る」と水に映る「影」とを響かせる。「や～べき」反語表現。～することがあっていいものでだろうか、おかしなことだ。＞とある。この歌の渋谷訳文は「浅い関係のあなたが残って、邸を守るはずの北の方様が出て行かれることがあってよいものでしょうか」とある。「いしま」は「窪」という語があって＜陶器などの歪み・窪み・瑕。＞と古語辞典にある。「やどもるきみ」を＜屋戸漏る貴身（蓋や縁から漏れる

陶器本体)＞と言えるなら、意訳のような言い回しで訳文の歌意を込めたもの、とも言えそうだ。陶器のヒビは真木柱の干割れにも通じるので、姫の歌との繋がりも良い。

思ひかけざりしことなり(思いがけないことです)。かくて別れたてまつらむことよ(このようにお別れ申し上げるとは)」

と言へば(と挨拶すれば)、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれ、かけとむべくも思ほえぬ世を　(和歌 31-09)

「水漏れは溜めたところで捨てる水　(意訳 31-09)

*注に＜木工の君の返歌。「言はま」に「岩間」を掛ける。「結ぼほれ」は、水の流れが滞る意と思いが鬱屈する意とこめる。「かけ」は「かけ留む」と「影留む」を響かす。＞とある。訳文は「どのように言われても、わたしの心は悲しみに閉ざされて、いつまでここに居られますことやら」とある。これも、意訳のような言い回しで訳文の歌意を込めたもの、だろうか。

いでや(本当に大変なことです)」

とてうち泣く(と嘆きます)。御車引き出でて返り見るも(中将は最後の御車を門の外まで引き出して振り返っては)、「またはいかでかは見む(もう会えないだろう)」と、*はかなき心地す(寂しくなります)。　*「はかなき心地す」は注に＜中将の御許の気持ち。＞とある。この文は敬語も無いし、玄関先での出発場面として納得できるので、主語は＜中将の御許＞で従いたい。

*梢をも目とどめて(夫人は道真公の「君が住む宿の梢を行くゆくと隠るるまでに返り見しはや」という古歌よろしく、木々の木末にまで目に止めて)、隠るるまでぞ返り見たまひける(見えなくなるまで振り返って御覧になっていました)。君が住むゆゑにはあらで(ただ、古歌にある「君が住む」愛しさからではなく)、ここら年経たまへる御住みかの(長年暮らしてこられたお住まいが)、いかでか偲びどころなくはあらむ(どうして名残惜しくないことがありましょうや)。　*「こずゑをも」は注に＜『源氏釈』は「君が住む宿の梢を行くゆくと隠るるまでに返り見しはや」（拾遺集別、三五一 、菅原道真）を引歌として指摘。現行の注釈書でも指摘する。＞とある。次の「君が住むゆゑにはあらで」が、この引歌の語句を引いた言い方になっているので、此処でこの引歌を丸々補語しないと言い換え文が成立しない。それにしても、この「君が住むゆゑにはあらで」には宮家令嬢としての自尊心と、それを蔑ろにされた悔しさが滲む。娘が父を慕う気持ちを詠んだ歌を即座に否定して返歌したばかりか、この場面でさらに、大将への未練は無い、と繰り返す無念さは痛々しい。柱は家の威厳を示す。しかし宮家令嬢なれば、これほどの家は生家に勝るものでも無い。しかし、子育てに費やした十数年は自分の人生であり、同時に大将の人生でもあったはずだった。その間の生活を支えたのが大将の稼ぎであったことが分からないほどの世間知らずでは無いが、自分は大将に軽んじられる身分でもない。それでも、大将は藤原右家筆頭の実力者であり、宮家の威厳だけで御せられる人ではない。だからこそ、互いに尊敬し合うことが全ての前提だったし、尊敬し合えたし、最後まで尊敬し合って行けると信じたし、信じたかった。が、挫折した。上流ゆえの深い煩悶が物の怪を呼び込んだか。六条御息所にも通じる価値観。これほどの上流意識は実感できないが、生きる位置の自覚、という精神構造は理解できる。

［第四段　式部卿宮家の悲憤慷慨］

宮には待ち取り（宮は一行を迎え入れて）、いみじう思したり（とても可哀想に御思いになりました）。母北の方（母の大奥様は）、泣き騒ぎたまひて（泣き騒ぎなさって）、

「太政大臣を（おほきおとどを）、めでたきよすがと思ひきこえたまへれど（あなたは結構なご親戚と思い申しなさるが）、いかばかりの昔の（どれほど昔からの）仇敵にか（あたかたきにか、憎らしい邪魔者ほどで）おはしけむとこそ思ほゆれ（いらっしゃったものかと思われます）。

*女御をも（我が姫君の王女御まで）、ことに触れ（何かにつけて）、はしたなくもてなしたまひしかど（除け者のようにあしらいなさったが）、それは（それは大臣が不遇の折にあなたがお助け申さなかったことでの）、*御仲の恨み解けざりしほど（不仲の恨みが解けない溝の深さを）、思ひ知れとにこそはありけめと思しのたまひ（思い知れという意味だろうとあなたは御思いなさり仰って）、世の人も言ひなししだに（世間の人もそのように言い做してはいましたが）、なほ（それでも）、*さやはあるべき（そんなものなのでしょうか、）。*人一人を思ひかしづきたまはむゆゑは（夫が妻を大事に思いなさるからは）、ほとりまでも*にほふ例こそあれと（その親類縁者までもその温情が及んで良い筈だと）、心得ざりしを（承知しておりますが。）、　*「女御をも」は注に＜大北の方の姫君、王女御をさす。「澪標」巻に初出。入内して女御となるが、源氏方の養女として入内した前斎宮が「少女」巻で中宮に立ち、立后が叶わなかった。＞とある。　*「御仲の恨み」は注に＜源氏の須磨流謫前後に式部卿宮が源氏に対して冷淡な態度をとったことへの恨み。＞とある。　*「さやはあるべき」は＜それで良いのだろうか＞という反語と、＜そんなことがあるのだろうか＞という疑問とが混じった言い方、かと思う。なお、この句は「心得ざりしを」からの倒置と思われる。　*「人一人を」については、注に＜源氏が紫の上を大事にするからには、その親類縁者までも厚遇してよい、の意。＞とある。此処では「人」が＜紫の上＞を意味するというよりは、「人一人を思ひかしづく」という言い方が＜夫が妻を、または妻が夫を、大事に思う＞という意味の成句のようなもので、つまり源氏殿の妻は紫の上なので、という順番なのだろう。　*「にほふ」は「匂ふ・丹延ふ」で＜中の熱が表面周囲に伝わって及ぶ＞ような語感。「ためしこそあれ」は＜普通なら在る→在って良い筈＞。

まして（その上に）、かく末に（この晩年になって）、*すずろなる継子かしづきをして（わけの分からない継子可愛がりをして）、おのれ古したまへるいとほしみに（自分がお古にした申し訳に）、実法なる人の*ゆるぎどころあるまじきをとて（実直な人で浮気癖の無い者をと）、取り寄せもてかしづきたまふは（右大将を間に合わせの婿にして藤原氏の機嫌を取るなどは）、いかがつらからぬ（何と憎らしいことか）」　*「すずろなる」は＜気ままな、場当たりの＞という語感だが、この大奥様の口調では訳文の＜わけの分からない＞が良く馴染む。　*「ゆるぎどころ」は＜移り気のあるところ→浮気癖＞。

と、言ひ続けののしりたまへば、宮は、

「あな（ああ）、聞きにくや（聞き苦しい）。*世に難つけられたまはぬ大臣を（現政権に於いて誰からも口出しを受けなさらない大臣を）、口にまかせてなおとしめたまひそ（思いつくまま口にして悪くなど言いなさいますな）。*かしこき人は（畏敬すべき人事権者の源氏大臣は）、*思ひおき（日頃からの付き合いを心に留めて人を評価し）、*かかる報いもがなと（異動時に、それに相応しい処遇にこそなるようにと）、*思ふことこそはものせられけめ（一度下した判断は必ず実行なさ

っていらしたようだ)。*さ思はるるわが身の*不幸なるにこそはあらめ(その大臣の判断に於いて今そなたが申した‘御仲の恨み’なる先の不遇時の不明を恨まれる、と思われる私の立場が不幸なものになるのは仕方がない)。　*「世」は＜世間＞ではなく＜当代＞であり、即ち＜帝＞を意味する。太政大臣なのだから、「世に難つけられたまはぬ」ことの背後に帝の意向がある事は自明だ。が、帝を「主上」と口にするのも畏れ多いので「世」とぼやかす。なので、「世」は＜現政権＞と言い換える。「難つく」は＜非難する＞とあるが、政府内に於いては誰一人と太政大臣に＜非難＞どころか＜口出し＞すら出来なかっただろう。　*「かしこし」は人智の＜賢さ＞ではなく、権力者の座に着く運を持つ＜畏さ＞だ。宮は源氏殿が帝から絶対の信任を得ていることを知っている。この現実の実力差からして、宮は源氏殿の不遇時代に藤原右家に肩入れした自らの不明を反省すること頻りなのだろう。此処の文意はそれを意識した人事の話に見える。また、そのように人事が主題の話として読まないと、この文は曖昧な言い回しなので何を言っているのか分からない。さらに言えば、政治は人事だ、という核心を突く作者の見識の高さに感服する。それにしても王家の血筋だけが頼りの宮の立場からして、朱雀帝時代に時の権力者たる藤原右家に同調することは、ある程度は止むを得なかっただろうし、まさか源氏殿がこんなに早く、またこんなに偉く復権するとは予見できなかったのも無理はない。ただ、藤壺中宮だけは疎遠にすべきではなかった、ようには思われる。ともあれ今や宮は、帝の伯父であることよりも、紫の上の父であることよりも、人事権執行者たる源氏殿の機嫌を損ねないことこそが身の安泰を保障する、ということを身を以って実感しているようだ。　*「思ひ置く」は＜(前もって)心に決めて置く＞。此処の文も主題が人事で無いとしたら、何を言っているのか分からない言い方だ。　*「かかる報い」は予ねて「思ひ置き」した＜ことに応じた報酬、が得られる人事＞。「もがな」は＜～だと良いなあ＞という願望を示す終助詞と古語辞典にある。ということは、「報いもがな」は＜報いになれば良いがなあ＞みたいな言い方だが、「報い」は＜適正な人事異動＞であり、大臣はその執行者だから＜なれば良いがな＞という傍観者の感想ではなく＜こそなるように＞という意味の上品な言い方くらいに読みたい。因みに、「もがな」は現代語だと「言わずもがな」のような定型句に残るだけだが、「言わずもがな」も＜言うまでもない＞という意味を＜言うまでもないがなあ＞くらいの柔らかい言い方にした語感だ。だから、「がな」の「が」は＜その他の可能性を示す接続助詞の言い切りで断定を避ける婉曲表現＞だし、「な」は＜自己判断を客観感想のように言う婉曲表現の終助詞＞で、つまりは「がな」で曖昧表現の終助詞と見做せそうだが、「も」は曲者だ。「も」は上語を強調する係助詞とされ、上語が「なり」「ず」の状態助詞なら述語が外に明示されるが、上語が名詞や形容詞の場合は「しも」のように＜今こそ通常の状態に変わって、さらにそれを上回る良い状態を望む＞という気持ちが内包される言い方のようだ。　*「思ふことこそはものせられけめ」の「こそ」は係り結び文型の語用で、「思ふこと(判断)」自体の有無を問題にしているのではなく、「ものせられけむ(実現なさったらしい)」を強調して＜必ず実現なさったらしい＞という文意、かと思う。　*「さ思はるる」の「さ」は母北の方がののしりたまうた「御仲の恨み解けざりしほど」を指す。　*「不幸なるにこそはあらめ」の文意は「不幸なるにあらむ(不幸なものになるだろう)」で、「こそ」は文意を強調するから＜必ず不幸になるだろう→不幸になるのは止むを得ない、仕方が無い＞くらいの言い方、かと思う。

*つれなうて(特に大上段に政策転換に伴うと言う形ではなく、通常の定期人事に於いて)、皆かの沈みたまひし世の報いは(すべてあの須磨へ流浪なさった時の応報人事は)、浮かべ沈め(ある者は引き立て、ある者は冷遇し)、いと*かしこくこそは思ひわたいたまふめれ(実に畏れ多くも各自に応じた信賞必罰が思い及びなさっているようです)。　*「つれなし」は＜平然としている＞語感だが、話題は人事であり、人事は大臣の業務なので＜平然と＞行って当たり前だから、特別な人事のようにではなく＜定期人事で＞という意味に読んだ。　*「かしこくこそは思ひわたいたまふめれ」と、また「こそ」だ。話の内容よりも、ものの言い方で何とか大奥様を説得したい、と言う宮の気持ちの表われだろうか。文意は「かしこく思ひ渡

し給ふめり(恐るべき周到さで思いを行き渡らせていらっしゃるようだ)」の強調だから＜各自ごとの隅々に至るまで信賞必罰が行き届く＞くらいの言い方なのだろう。

おのれ一人をば(その中でも、私一人だけを)、さるべきゆかりと思ひてこそは(尊敬すべき親と彼の奥方である我が娘が思ってこそは)、一年も(ひととせも、先年も)、さる世の響きに(あのように世間の大評判になるような)、*家よりあまることどももありしか(我が家には過ぎた長寿の祝賀も六条院で行なわれた)。それをこの生の(このしゃうの、私の生涯の)面目にて(めいぼくにて、名誉として)*やみぬべきなめり(それ以上は望まないでいるべきなのだろう)」　*「家よりあまることども」は注に＜式部卿宮の五十賀を新築の六条院で祝ってくれたことをいう。「少女」巻（第七章三段）に見える。＞とある。親の立場でものを言うから「思ひてこそ」などと紫の上に敬語を付けない、のだろうか。　*「止む」は＜止める＞で、何を「止める」かと言えば＜もっと上を望むこと＞なのだろう。

とのたまふに、いよいよ腹立ちて(大奥様はますます腹を立てて)、*まがまがしきことなどを言ひ散らしたまふ(宮の長寿祝いは源氏殿の権勢誇示に利用されただけだと大臣の狡賢さを口汚く言い散らしなさいます)。この大北の方ぞ(この大奥様ときたら)、*さがな者なりける(分からず屋なのですから)。　*「まがまがし」は「禍々し」で＜縁起が悪い、不吉だ、忌まわしい＞と古語辞典にある。が、これではどんなことを言ったのか分からない。が、縁起といえば、二年前の秋八月の六条院落成直後での宮の五十歳の長寿祝いが行なわれたようだが、源氏殿はその祝儀に間に合わせるようにと、その前年から六条院の完成を関係諸氏諸侯に急がせたことが少女巻第七章第三段に記されている。工事は急がせるほど、人数も増え、物資も集中し、混雑し、大騒ぎになる。宮は、それを源氏殿の自分への好意とでも思ったか、自分のために工事が急がれ、祝典も話題になり、その全てを名誉なことと思っているらしい。しかし、工事を急がせることが出来るのは源氏殿の動員力であり、大掛かりになるほど、実は権勢の誇示を意味する。大奥様は宮の長寿祝いが六条院の突貫工事のダシにされたと思っている。可愛くもない継子の紫の上の宮への好意でさえ、源氏殿に政治的に利用されたと被害妄想を膨らませる。そして、恐らく、その見方は正しい。だから、そういう源氏殿の狡賢さを口汚く罵った、のだろう。　*「さがな者」は＜手に負えぬ者。やかましや。＞と古語辞典にある。「さがない」は「口さがない」などのように＜遠慮が無い、聞き分けが無い＞または＜性質が悪い＞といった意味らしい。しかし、この「ぞ～なりける」は冗談ないし軽口の口調で、語り手による大奥様の人物評とはとても思えない。語り部女房は、本質を見抜いている大奥様に敬意を込めて＜分からず屋＞と言っているのだろう。

*大将の君(だいしゃうのきみ、大将は六条院で)、かく渡りたまひにけるを聞きて(夫人がこのように宮邸にお戻りなさったのを聞いて)、　*「大将の君」は注に＜場面は六条院の玉鬘のもとに変わる。＞とある。

「いとあやしう(また妙に)、若々しき仲らひのやうに(年若い夫婦のように)、ふすべ顔にてものしたまひけるかな(焼きもちを焼きなさったものだ)。正身は(本人は)、しか*ひききりに際々しき心もなきものを(そのようにせっかちできっぱりした性分でもないものを)、宮のかく軽々しうおはする(宮がこう軽々しく為さっては)」　*「ひききり」は＜苛立つさま。せっかち。＞と古語辞典にある。「きはぎはし」は＜けじめをはっきりさせる。きわだっている。＞とある。

と思ひて(と迷惑に思って)、君達もあり(子供たちのこともあり)、人目もいとほしきに(世間体も悪いので)、思ひ乱れて(対処に困ったが)、尚侍の君に(かんのきみに)、

「かくあやしきことなむはべる(このように変なことになりました)。なかなか心やすくは思ひたまへなせど(騒ぎを起こす者が居なくなったので、却って気楽にも存じられますが)、さて片隅に隠ろへてもありぬべき人の心やすさを(そのまま居残ったとしても邸の片隅に奥まるのも厭わないような妻のおとなしさを)、*おだしう思ひたまへつるに(あなたと同居しても、安心に思っておりましたのに)、にはかにかの宮ものしたまふならむ(性急に宮が迎えを寄越しなさったようです)。人の聞き見ることも*情けなきを(人目にも呆れた有様ですので)、うちほのめきて(ちょっと様子を見に行って)、参り来なむ(また戻ります)」　*「おだし」は「穏し」で＜穏やかである。安らかだ。＞とある。安心だと思っていた、ということだが、それは尚侍と同居しても、ということなのだろう。　*「情けなき」は「情けなし」の連体形で「情けなきさま(情けない状態→呆れた有様)」を意味する。

とて出でたまふ(と話して家にお帰りなさいます)。

*よき上の御衣(高貴な身分を示す黒の袍に)、*柳の下襲(白表に裏青の燕尾飾り)、青鈍の綺の指貫着たまひて(青ねずの光沢生地の袴を召されて)、引きつくろひたまへる(身支度なさった大将は)、いとものものし(とても立派です)。「などかは似げなからむ(お似合いの麗しさではありませんか)」と、人びとは見たてまつるを(着付けを手伝った対の部屋女房たちは御二人を拝し申し上げるが)、尚侍の君は(かんのきみは)、かかることどもを聞きたまふにつけても(こうした家庭不和をお聞きなさるにつけても)、身の心づきなう思し知らるれば(自分の立場が心外なものに思われなさって)、見もやりたまはず(大将を見向きも為さいません)。　*「うへのおんぞ」は「表の衣(うへのきぬ)」のこと、と古語辞典にある。「上の衣」は＜束帯に用いる上着＞とあり、「束帯」は朝廷の正服装束で上着は袍(はう)という左前の前身頃で右端まで覆う形状の唐式の綾織物を着る形式らしいので、即ち「上の御衣」は「袍」だ。で、「袍」は位階によって色が決まっている、とのこと。天皇と皇太子の黄茶系は別格として、風俗博物館サイトの装束ページには「公服である袍には当色（とうじき）が決められており、平安中期以降は臣下の一位から四位までが黒の綾を、また五位が緋、六位は縹はなだを用い、綾には諸家専用の織紋が表されていた。」と説明されている。で、大将は三位以上とされるので「黒の綾」だったワケだ。以下に「下襲(したがさね、燕尾内着)」や「指貫(さしぬき、裾紐ズボン)」の具体的な色使いの説明があるので、この「よき」は＜上質の＞という服自体の一般的修辞ではなく、具体的に＜大将の高貴な身分を示す黒色の＞という意味に違いない。　*「やなぎ」は「柳襲(やなぎがさね)」という、表が白で裏が青の袷地の色組み、のことらしい。

[第五段　鬚黒、式部卿宮家を訪問]

宮に恨み聞こえむとて(宮に抗議申し上げようと)、参うでたまふままに(宮邸に参上する出掛けに)、まづ(先ず)、殿におはしたれば(自邸にお寄りなさると)、木工の君など出で来て(木工の君などが迎え出て)、ありしさま語りきこゆ(その時の様子を殿にお話し申します)。姫君の御ありさま聞きたまひて(姫君が殿をお待ち申しなさったご様子をお聞きになって)、男々しく念じたまへど(大将は男らしく取り乱さずにじっと聞いていらっしゃったが)、ほろほろとこぼるる御けしき(涙を抑えられないご様子は)、いとあはれなり(とても痛々しい)。

「さても(あのように)、世の人にも似ず(普通の人とは違う)、あやしきことどもを見過ぐすここらの年ごろの心ざしを(奇異な言動の数々を大目に見てきた私の長年の誠意が)、見知りたまはずありけるかな(お分かり頂けないものか)。いと思ひのままならむ人は(もっとわがままな者な

ら)、今までも立ちとまるべくやはある(今まで夫婦仲は続いてこなかっただろう)。よし(別に里帰りしても良いだろう)、かの正身は(あの人自身は)、とてもかくても(いずれにしても)、*いたづら人と見えたまへば(変人に見えなさるので)、同じことなり(どうせ人目から隠すのだから)。幼き人びとも(ただ、幼い子供たちは)、いかやうにもてなしたまはむとすらむ(如何育てなさるお心算か)」　*「いたづらびと」は＜役に立たない人。無用の人。＞また＜落ちぶれた人。＞や＜死者。＞とも大辞泉にあり、訳文には＜廃人＞とある。病人だから里帰りしても仕方が無い、という言い方は無難だが、その＜病人である＞ことの結論としての「同じこと」に＜里帰りしても仕方がない＞という語感はない。「同じこと」は＜あの人は異常だから、家に居たとしても人目に付かないように隅に隠すので、里帰りして居なくなっても大差は無い。＞という文意だから＜どうせ人目を避けるのだから＞という言い方だ。ということは、「徒人」は＜廃人＝回復が見込めない病人＞よりは＜異常な人＝変人＞が相応しそうに見える。また語義からしても、「いたづら」は＜(構って欲しくて)無駄に手を焼かせる→面倒をかける＞だから「いたづら人」は＜厄介者＞で、幽閉する程の＜手の付けられない厄介者＞なら、やはり＜変人＞だ。

と(と大将は)、うち嘆きつつ(困惑しつつ)、かの真木柱を見たまふに(あの柱に挟んだ姫の真木の柱の歌を御覧になると)、手も幼けれど(字の拙さもいたわしく)、心ばへのあはれに恋しきままに(その子供心に父を慕う気持ちが可愛くてならず)、道すがら涙おしのごひつつ参うでたまへれば(道すがら涙を押し拭いながら宮邸に参上申しなされば)、対面したまふべくもあらず(夫人はご面会に応じなさる筈もありません)。

「*何か(会うことはない)。ただ*時に移る心の(大将は、偏に見慣れた其方に飽きて新しい女に心が移ったという身勝手な気持ちなので)、今はじめて変はりたまふにもあらず(今はじめて変わりなさったことでもない)。年ごろ思ひうかれたまふさま(年越しで六条の姫を思い浮かれなさって居ることは)、聞きわたりても久しくなりぬるを(聞き及んで久しいので)、いづくをまた思ひ直るべき折とか待たむ(改心なさる日は期待できない)。いとど*ひがひがしきさまにのみこそ見え果てたまはめ(話し合っても、其方はますます醜態をさらして大将に見限られなさるだけだろう)」　*「何か」は注に＜以下「見え果てたまはめ」まで、式部卿宮の娘北の方への諫めの詞。「何か」の下には「会はむ」などの語句が省略されている。「か」（係助詞、反語）。どうしてお会うことがあろうか、会う必要はないの意。＞とある。 *「時に移る心」は注に＜式部卿宮は鬚黒を、源氏におもねって玉鬘と結婚したと解釈する。＞とある。が、意味不明だ。一体、誰の解釈なのだろう。どこかの文章で「時に移る」が＜時流におもねる＞という意味だったとして、「時に移る」という言い方はそう読めることもある、というだけのことだ。「時に移る」は＜時間の経過によって変わる＞とも読めるし、むしろその方が一般的な読み方だろうし、ここでもその意味に見える。で、この注釈は気に入らないので、あっさり無視しようかと思ったが、この際、宮の考え方を整理する良い機会かと思い直して、あえてノートする。注に言う、大将が＜源氏におもねって玉鬘と結婚した＞と解釈することが式部卿宮にあったとしても、それは、そういう面もあるかも知れない、くらいの宮の分析だ。大奥様なら、それを強く思って源氏殿に反感を抱いたかも知れないが、宮はむやみに太政大臣を敵視するなと大奥様をたしなめていた。今回の大将の婚儀の主眼が、そうした政略だったなら、宮は大将夫人たる娘に理詰めで世の中の因果を含めることも出来ただろうし、大将夫人自身も納得しやすかっただろう。そして、婚儀である以上は関係各家の思惑は当然絡むし、その調整が付かなければ破談する。だから大将は、事前に調整計算はしたし、現に調整は成功した。しかし、大元は大将の対の姫に対するしょうふく征服欲だったのであり、それは家庭不和が下敷きになっていたのであり、夫人は疾うに愛想尽かしをされていた、と宮は考えていて、だからこそ乱心した娘が不憫であり、対の姫との確執が表面化して両大臣家に対する不要な不都合が生じる危険を避けるためにも、また当然に目下の宮家の体面上からも、

大将夫人を大将家に放置できなかった、のだろう。そうした宮の姿勢からしても「時に移る」は＜時勢におもねる＞では在り得ない。　*「ひがひがし」は＜［形シク］正常な状態でない。まともでない。ひねくれている。＞と大辞泉にある。「僻む」は＜片寄る、偏る、曲がる、曲げる＞。もっと端的に言えば「僻者（ひがもの、変わり者。常軌を逸した人物。）」という語が古語辞典にある。大将夫人の異常さを最大限に気遣った宮の言い方なのだろうが、分かり易く＜醜態＞と言ってしまう。「見え果つ」は「見果つ（見切る、見限る）」ではなく＜見切られる、見限られる＞。

と諫め申したまふ（と制し申しなさいます）、ことわりなり（当然です）。

「いと（私の浮気に腹を立てて里帰りなさるとは、まったく）、若々しき心地もしはべるかな（若い時みたいですね）。思ほし捨つまじき人びともはべればと（お見捨てなさる筈の無い子供たちも居りますので、まさかあなたは家を離れなさるまいと）、のどかに思ひはべりける心のおこたりを（気楽に考えておりました気の弛みを）、かへすがへす聞こえてもやるかたなし（何度愚痴っても後の祭りですよ）。*今はただ（こうなってしまった以上は）、*なだらかに*御覧じ許して（あなたは平静を取り戻して当家のことはお構いなさらず）、*罪さりどころなう（里帰りの理由は奇病の所為ではなく、私の身勝手な浮気にある事を）、世人にもことわらせてこそ（世間の人にも分からせてから）、かやうにももてないたまはめ（此方でお暮らしなさいませ）」　*「今はただ」は＜夫人が大将家に居て対の姫との不仲が懸念された以前とは違って、今は宮邸に里帰りしてしまったのだから、もう～＞という意味だ。　*「なだらか」は＜滑らか、平穏＞とあるが対象が分かりにくく、大辞泉には＜人の性格・態度などが、穏やかなさま。角立たないさま。＞ともあるので、夫人に＜平静になって＞と言ったもの、かと思う。　*「見許す」は＜見ても放って置く→気にしない＞だから、大将や大将家のことは＜お構いなく＞ということなのだろう。*「罪さりどころなし」は「避り所無し」が＜［形ク］《逃れる場所がない意から》逃れようがない。弁解の余地がない。＞と大辞泉にあり、罪の逃れようがない、という意味。で、「罪さりどころなう」は、自分が＜罪避り所無く＞あることを、の意らしい。全て私の所為にすれば良い、みたいな言い方だろうか。しかし、そういう言い方をする意図が分からないので、夫人の奇病の所為ではなく、と補語して置く。そうすると、苦し紛れの言い繕いの感じになる、気がする。

など（などと大将は）、聞こえわづらひておはす（夫人への取次ぎ女房に苦しい言い訳を申しなさいます）。「姫君をだに見たてまつらむ（せめて姫君だけでもお会い申したい）」と聞こえたまへれど（と申しなさいましたが）、出だしたてまつるべくもあらず（夫人はお出し申す筈もありません）。

男君たち（男の子たちで）、十なるは（十歳になる上のほうは）、殿上したまふ（童殿上なさっています）。いとうつくし（とても可愛い）。人にほめられて（御所内で評判がよく）、容貌などようはあらねど（顔立ちは良くは無いが）、いと*らうらうじう（よく気が付く子で）、ものの心やうやう知りたまへり（分別も次第に付いてきていらっしゃいます）。　*「らうらうじ」は大辞泉に＜物慣れている。物事に巧みである。＞や＜才たけて情感が豊かである。＞や＜上品で美しい。＞とあり、訳文には＜利発＞とあるが、どうも語感が掴めない。「らう」は「労」で＜苦労、努力、ほねおり、きづかい、功労、年功＞また＜熟練すること＞とあるので、「らうらうじ」は＜労を厭わない性格、姿勢＞ではありそうだ。それも、此処では「ものの心知る（物事の意味が分かる、分別が付く）」ことに繋がる意味だから＜気遣いがある、気が付く、思慮深い＞くらいの言い方のようだ。

次の君は(下の子は)、八つばかりにて(八歳ほどで)、いと*らうたげに(とても幼げで)、姫君にもおぼえたれば(姫君にも思えるほどだったので)、かき撫でつつ(大将はその子の頭を撫でながら)、　*「らうたげ」も「労」の語幹を持つ語だ。ただ、「労たし」は＜傍目に「労」を「たし(してやりたい)」ような者＞に対して＜庇いたくて労しい＞と思う気持ちを言うので、その「気(げ、そう見える者)」は＜労しく幼げ＞ということだ。

「あこをこそは(おまえのことを)、恋しき御形見にも見るべかめれ(恋しい姫君の代わりと思うことにしよう)」

など、うち泣きて語らひたまふ(涙がちにお話しなさいます)。宮にも、御けしき賜はらせたまへど(御機嫌伺いを願いあげなさったが)、

「風邪おこりて(風邪を引いて)、ためらひはべるほどにて(休んでおりますので)」

とあれば(とお断りあったので)、はしたなくて出でたまひぬ(不調法なままお帰りなさいます)。

[第六段　鬚黒、男子二人を連れ帰る]

小君達をば(こきんだちをば、男の子たちを)車に乗せて(牛車に同乗させて)、*語らひおはす(大将は事情を聞き分けさせなさいます)。　*「語らふ」は、単に＜話をする＞でもあり、親しく＜打ち解けあう＞でもあり、男女が＜情交する＞でもあるが、その他に＜説得する、丸め込む＞という意味も古語辞典に説明されている。子供を「説得する」場合は＜言い聞かす＞のだろう。

六条殿には(六条院には子供たちは)、え率ておはせねば(とても連れていらっしゃれないので)、殿にとどめて(自邸に置いて)、

「なほ(また)、ここにあれ(此処で暮らしなさい)。来て見むにも心やすかるべく(様子を見に来て世話するにも安心できるから)」

とのたまふ(と仰います)。うち眺めて(母と別れた悲しさに子供たちは気落ちして)、いと心細げに見送りたるさまども(とても心細そうに見送る姿が)、いとあはれなるに(実に可哀想で)、もの思ひ加はりぬる心地すれど(大将は心配事が増えたような気がしたが)、女君の御さまの(六条院に戻って見た新妻の姿が)、見るかひありてめでたきに(それに引き換えて余りあるほどに美しくて)、ひがひがしき御さまを思ひ比ぶるにも(正妻の鬱屈した御表情と思い比べれば)、こよなくて(この上なく素晴らしく)、よろづを慰めたまふ(全てが報われなさいます)。

うち絶えて訪れもせず(それきり大将は宮邸には、一度も訪れず手紙も出さず)、はしたなかりしにことづけ顔なるを(面目ないからと言い訳にしているようなのを)、宮には(宮に於かれては)、いみじうめざましがり嘆きたまふ(実に思い遣りのない不愉快なことと嘆きなさいます)。

春の上も聞きたまひて(同じ父宮の娘である紫の上も事の次第をお聞きになって)、

「ここにさへ(わたしまで)、恨みらるるゆゑになるが苦しきこと(宮筋から恨まれる立場になるのが辛いことです)」

と嘆きたまふを(と嘆きなさるのを)、大臣の君(源氏殿は)、いとほしと思して(同情なさって)、

「難きことなり(世の中は難しいものです)。おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに(私の一存で出仕の件も決めかねる姫君の縁故関係には)、内裏にも心おきたるさまに*思したなり(帝に於かせられても気懸かりなこととお思いのようです)。　*「おぼしたなり」は注に＜「た」（完了の助動詞、存続の意。連体形「たる」の「る」が撥音便化し、無表記された形）「なり」（伝聞推定の助動詞）。下文の「恨み解けたまひにたなり」も同じ。お思いになっているようだ。＞とある。

兵部卿宮なども、怨じたまふと聞きしを(私が大将の婚儀を許したことをご不満に思って御出でと聞きましたが)、さいへど(そうはいっても)、*思ひやり深うおはする人にて(人の立場や事情を深くご理解なさる方なので)、聞きあきらめ(聞き分けて)、恨み解けたまひにたなり(納得されたようです)。おのづから人の仲らひは(自然と夫婦仲というものは)、忍ぶることと思へど(本人たちだけのことのようでも)、隠れなきものなれば(周りに影響が出るものなので)、*しか思ふべき罪もなし(誰かが一人で責任を感じるべきものでも無い)、となむ思ひはべる(とのように思います)」　*「思ひ遣り」は＜人の身の上・心情などを推察し同情すること＞と古語辞典にある。具体的に言えば、源氏殿が藤原両家の圧力に屈した事情だ。　*「しか」は「おのが心ひとつにもあらぬ」ことで、「思ふべき罪もなし」は其れを＜罪に思う必要は無い＞という言い方だから、全体の文意は＜夫婦仲は本人同士の問題だが、関係各位に色々と影響が出てしまう。それで間の悪いことが周りで起こっても、そのことに誰かが責任を感じるべきものでは無い＞という事かと思うが、かなり解かり難い。

とのたまふ(と仰います)。